

# 高原町教育研究所

I	研究主題	3-2-1
II	主題設定の理由	3-2-1
III	研究の目標	3-2-1
IV	研究の仮説	3-2-1
V	研究の全体構想	3-2-2
VI	研究の実際	3-2-3
1	基本的な研究の考え方	
2	国語科学習指導研究班の取組	3-2-4
(1)	たかはるスタイルの学習指導過程	
(2)	『「話すこと・聞くこと」の力を身に付けさせる指導の系統表』の作成	
(3)	日常指導での工夫	
3	算数・数学科学習指導研究班の取組	3-2-7
(1)	系統性を意識した「分かる授業づくり」の考え方	
(2)	系統表の作成	
(3)	ねらいに応じた授業モデルの作成	
(4)	活用ブックの作成	
(5)	授業実践例	
VII	研究の成果と課題	3-2-10
1	研究の成果	
2	研究の課題	

【参考文献】

【研究同人】

## I 研究主題

「たかはるの子」の実生活で生きて働く学力をはぐくむ授業の創造  
～学力に関する実態調査・分析と9年間を見通した小中一貫教育を生かして～<2年次>

## II 主題設定の理由

社会情勢の変化の激しい今日、将来を担う子どもたちに確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことが重要である。平成20年3月に告示された小学校学習指導要領においても、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力をはぐくむことの双方のバランスを重視した確かな学力の育成が示されている。

本研究所では、一昨年度まで「ふるさとを愛する『たかはるの子』の育成」を主題として高原ならではの地域素材を生かした小中一貫教育（通称「ふるさと学習」）の研究を4年間の計画で進めてきた。また、本町では、小中一貫教育を積極的に推進し、高原中学校区及び後川内中学校区における合同研修会や合同授業研究会等を計画的に行い、知・徳・体のバランスのとれた児童・生徒の育成に努めている。その結果、地域素材集の作成や「ふるさと学習」の年間指導計画への位置付けなど、一定の成果が得られた。一方、「生きる力」の知の側面である学力については、以前から課題があり、昨年度から学力向上に向けた研究に取り組んできた。新たな研究のスタートとして、まず、高原町内の児童・生徒の学力の実態を把握し、教育的課題の焦点化を図るために、全国学力調査の結果の分析を行った。その結果、国語科については、つなぎ言葉を理解して表現へ活用する力や話し合いの場面における話す・聞く力、そして実用的文章を読み取る力などの児童・生徒の共通した課題が見られた。また、算数・数学科については、（ ）がある時の計算や分数のかけ算、資料の正しい活用に児童・生徒の共通した課題も見られた。これらの結果から、学力向上を図るには、小・中学校の9年間を見通した系統的な指導により児童・生徒の実生活で生きて働く学力を児童・生徒に身に付けさせることが重要であり、研究課題の解決への糸口となると考える。言い換えれば、小・中学校の義務教育の過程で児童・生徒が実感を伴って基礎的・基本的な知識・技能を習得し、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けることが不可欠となる。

そこで、本研究所は、本町の児童・生徒「たかはるの子」の学力を正確に把握するため、昨年度に行った全国学力調査の分析を活用しながら、児童・生徒の学力の課題を明確にし、目指す児童・生徒像の具現化を図る。小中一貫教育の特徴である9年間を見通した指導の充実を図られるように、「国語科学習指導研究班」「算数・数学科学習指導研究班」の2つに分けて研究を進めていく。そして、調査の分析の結果から分かった課題を、「たかはるの子」に身に付けさせたい学力とし、系統的な指導の充実を図るための系統表の作成及び工夫・改善や、この系統表を生かした「分かる授業づくり」の指導方法の研究及び授業研究会の実施による実践的な研究を行う。このように研究を進めることにより、本町の「たかはるの子」が実生活で生きて働く学力をはぐくみ、ふるさと高原の将来を担う児童・生徒へと成長させることができると考え、本主題を設定した。

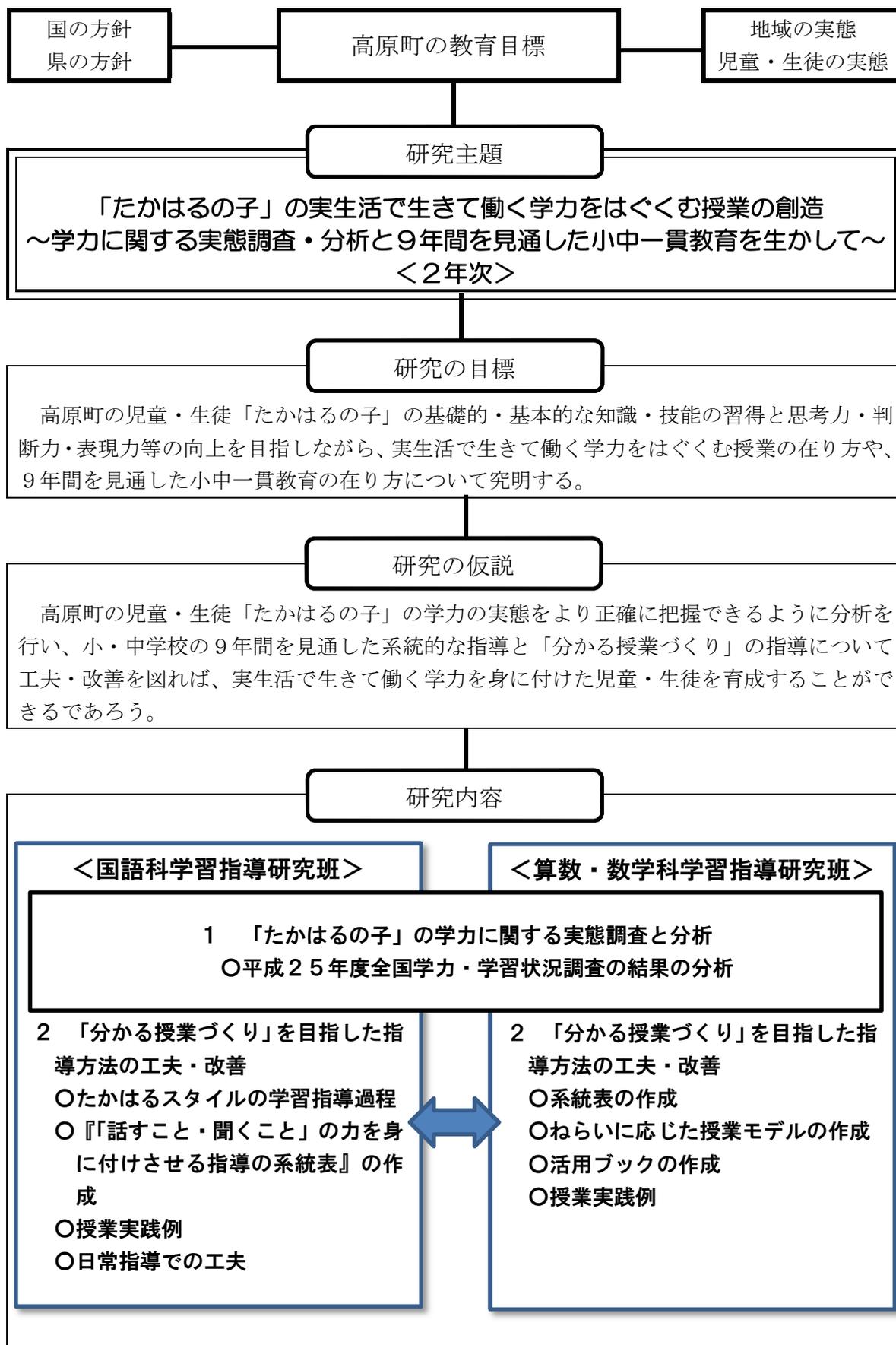
## III 研究の目標

高原町の児童・生徒「たかはるの子」の基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の向上を目指しながら、実生活で生きて働く学力をはぐくむ授業の在り方や、9年間を見通した小中一貫教育の在り方について究明する。

## IV 研究の仮説

高原町の児童・生徒「たかはるの子」の学力の実態をより正確に把握できるように分析を行い、小・中学校の9年間を見通した系統的な指導と「分かる授業づくり」の指導について工夫・改善を図れば、実生活で生きて働く学力を身に付けた児童・生徒を育成することができるであろう。

## V 研究の全体構想



## VI 研究の実際

### 1 基本的な研究の考え方

#### (1) 実生活で生きて働く学力とは

これからの社会を生き抜くためには、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をバランスよく身に付けさせるなど、児童・生徒の学力の質を高める視点が重要となる。この視点を踏まえ、実生活で生きて働く学力とは、「生涯にわたり実社会を主体的に生きていくための学力」としてとらえた。

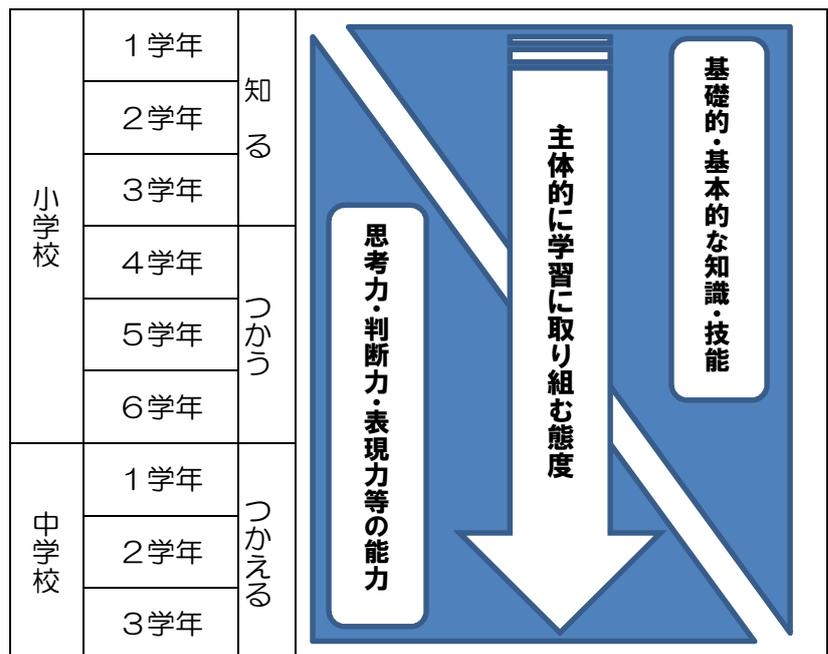
#### (2) 9年間を見通した小中一貫教育の考え方

##### ア 系統的な指導について

実生活で生きて働く学力を身に付けさせるには、小・中学校の9年間を見通した系統的な指導が不可欠である。国語科学習指導研究班では、系統的な指導を図1に示すように児童・生徒の発達段階に応じて3つの「知る」「つかう」「つかえる」段階にわけて指導することにより、9年間を見通した系統的な指導を行うことができると考えた。この3段階の位置付けは、系統性が分かりにくいという教科の特性を考え、9年間を見通した指導のめやすとして活用したいという意図で行った。

算数・数学科学習指導研究班では、教科の特性を生かして、9年間を見通しながら系統性を意識した指導の実践ができるような工夫が重要であると考えた。そのためには、指導者である教師が常に意識できるような系統表作りが必要であると考えている。

小・中学校一貫した指導を行う際、学力の3つの要素である「主体的に学習に取り組む態度」「基礎的・基本的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」を児童・生徒にバランスよく身に付けさせることが重要である。9年間を見通した指導において、小学校低学年から中学校の発達段階の過程で、「基礎的・基本的な知識・技能」から「思考力・判断力・表現力等の能力」へとシフトしながら指導することを目指したい。



【図 1】

##### イ 系統性を意識した指導者の共通理解と共通実践

9年間を見通した小中一貫教育を推進する原動力は、小学校、中学校が課題の共有化を図り、同じ意識で系統的な指導に取り組むことである。本研究では、系統表作りをはじめ、「分かる授業づくり」の研究を通して、小・中学校の授業研究会の実施など共同研究の機会を設ける工夫も行っている。

## 2 国語科学習指導研究班の取組

本町の児童・生徒の国語科での実態調査と分析の結果、課題は

- 課題① つなぎ言葉の指導をどう進めればよいか。  
 課題② 話す・聞く力を高める指導（特に話し合う場面）はどうあればよいか。  
 課題③ 実用的文章を読み取る力を高める指導はどうあればよいか。

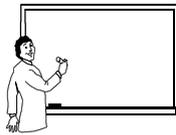
の3点であった。

これら3点の課題解消を意識して、「分かる授業づくり」に取り組んできた。

### (1) たかはるスタイルの学習指導過程

「分かる授業」のために、学習指導過程の工夫は必要である。しかし、しなければならない普遍的なものは、町内すべての教室で実践されてこそ、町内の児童・生徒の学力向上につながるのではないかと考え、国語科における「たかはるスタイルの学習指導過程」を確立し、先行実践の後、町内への周知を図ることにした。

#### [たかはるスタイルの学習指導過程]

段 階	学 習 活 動	留 意 点
導 入	<b>つかむ</b> ○既習事項の確認 ○前時の復習 ○学習問題の提示 ○学習課題やめあての設定	 ○既習事項を確認したり、復習を行ったりして、前時と本時との学習問題の比較を行う。 ○学習課題やめあてを設定し、板書したり、掲示したりして <b>焦点化や視覚化を図る。</b> ○ <b>課題解決の見通しを視覚化</b> し、児童・生徒が主体的に学習へ取り組めるようにする。
	<b>見通す</b> ○課題解決の見通し ・ 方法・手順・学習の流れ	
展 開	<b>調べる</b> ○自力解決の場面の設定 <b>個人思考</b>	 ○個人思考に十分時間を取り、教師は、一人一人が解決できるよう支援する。 ○個人思考後、ペアやグループで、自分の考えを相手に分かりやすく伝えさせる場を設け、 <b>個々の考えの共有化を図る。</b> ○個人・ペア・グループでの考えをまとめさせたり、比較させたり、賛成や反対、相違点を見つけさせたりする等の意図をもった学び合いをさせる。
	<b>考える</b> ○学び合い・伝え合いの場面の設定 <b>ペア・グループ</b>	
	<b>深める</b> <b>考えの交流</b> 課題②への挑戦 話す・聞く力を高める場を意識した交流に！	
終 末	<b>まとめる</b> ○本時のまとめ ○ <b>学習活動の振り返りと評価</b>	○本時のまとめを児童・生徒の言葉で考えさせ、発表させる。その際、字数制限・キーワ



**課題①への挑戦**

つなぎ言葉の指導の場として、まとめの作文や発表の機会を入れて！

ード・文型の提示、穴埋め等のヒントを与え、自分でできるよう支援する。

○共有化するために、**小黒板**や**ワークシート**、**ICTの活用**など**視覚化**も図る。

**(2) 授業実践例 (中学2年生国語)**

単元名	話す・聞く「相手の立場を尊重しよう」(光村図書2年)			
目標	話し合いの基本的な心構えを理解し、相手の立場を尊重しながら意見を述べる方法を身に付ける。			
☆取り組んだ課題☆ 「課題① つなぎ言葉の指導をどう進めればよいか」	段階	学習内容及び学習活動	形態	指導上の留意点 資料・準備
<p>本時の学習目標や進め方を黒板に明示し、生徒自身に確実に意識させた。</p> <p>投書者の意見を正しく読み取るために、拡大した文章にラインを引きながら視覚的に訴え、読み取る内容を<b>焦点化</b>した。</p> <p>自分の立場を明確にする手立てとして、「同意」「反論」の札を準備した。</p> <p>個人で考えた意見を同じ立場の人、違う立場の人と、グループを替えながら意見交換し、個々の考えの<b>共有化</b>を図った。</p>	導入	1 学習の目標と見通しをもつ。  ○相手の考えを受け入れながら、自分の意見を述べる方法を身につけよう。	個人 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>「相手の立場を尊重しよう」の題名から相手意識をもたせ「話し合い」の意義や心構えを十分にもたせる。</li> <li>「練習」としての話し合いを意識させるため、提示する話題に各個人に「同意」「反論」の立場をあらかじめ指示しておく。</li> </ul> 「立場」「尊重する」の意味カード
	展開	2 投書欄の文章を読む。  3 投書した人と同意(4人)・反論(3人)のそれぞれの立場でグループを編成し意見を考える。  4 立場の違う人との混合グループで意見交換をする。 ・4人グループ(同意2反論2) ・3人グループ(同意2反論1)	個人 7分  個人・グループ 13分  グループ 15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>話題について関心をもたせる。</li> <li>丁寧に投書者の意見を読み取らせる。</li> <li>自分の立場の意見をじっくりと考えさせ話し合わせ、まとめさせる。</li> <li>相手の考えを受け入れるための上達のポイントの話し方やつなぎ言葉を使った相手に伝わる内容構成を意識させる。</li> <li>メモを取りながら話し合いに参加させる。</li> </ul> 「同意」「反論」の札 投書文章の拡大図 投書欄のプリント ワークシート ワークシート 上達ポイントカード つなぎ言葉カード
	終末	5 本時のまとめを行い、学習活動を振り返り今後につなげる。  ○相手の考えを受け入れながら意見を述べるには、四つの上達ポイントを使うとよい。	個人 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の考えを受け入れるためのポイントや注意点や、立場を尊重しながら話し合うことで感じたこと、学んだことの感想を自分の言葉でまとめさせる。</li> </ul> 課題①

<指導の成果>

- 話し手の発言内容をつなぎ言葉「つまり」を使って、要約することを中心に活動をさせることにより「聞く」意識が高まった。
- まとめを記述させてきたことで、つなぎ言葉を選び表現する力の向上を図ることができた。

<今後の課題>

- 日常の活動の中で、指導者が意識して学習内容につなぎ言葉の活用を位置付けることで、課題の解決に迫っていく。

### (3) 『話すこと・聞くこと』の力を身に付けさせる指導の系統表」の作成

「たかはるスタイルの学習指導過程」において学び合い、伝え合いは欠かせない段階である。その中で、前単元までの既習事項が、学び合いや伝え合い、発表の中で生かされてこそ、児童・生徒の言語活動は充実し、学習の深まりをみせ、共有化につながる。

児童・生徒がどこまで「話すこと・聞くこと」の力を使えるべきか、教師自身が把握しておくことにより、伝え合う力を深化させ、児童・生徒の学力向上に寄与するものと考え、『話すこと・聞くこと』の力を身に付けさせる指導の系統表」を作成した。

		「話すこと・聞くこと」の力を身に付けさせる指導の系統表		
		4月	5月	6月
知 る	小1年	よろしくね 丁寧な言葉遣いで の自己紹介をする。	ともだちにはな そう 話型を参考 にして話す。	きいてつたえよ う 大事なことを落と さず聞き、他の人に 伝える。
	小2年		ことばで絵をつ たえよう 説明するときの言葉 ・順序を表す時 はじめに つぎに それから さいごに ・向きを表すとき だて よこ 右向き 左向き 上向き 下 向き	まよい犬をさが そう 大事なことを短いこ とばでメモに書く。
	小3年		話したいな、うれ しかったこと 筋道を立てて話し たり、話し手の伝え たいことを聞き取る。	インタビューをし てメモをとろう 話のまともりに気 をつけて聞く。 ことばの順序を表 すときに使う言葉 ・一つ目は 二つ目 は 三つ目は ・はじめに 次に さいごに

縦に見ることで、各学年の同月に、話す・聞く単元が設定されていることが分かる。その学習レベルに合っているか、向上しているか、確認できる。

単元毎に、指導すべき言葉を載せたことで、既習の言葉を生かしたり、未習の言葉や関連単元を確認めたりできる。

『話すこと・聞くこと』の力を身に付けさせる指導の系統表」(一部抜粋)

### (4) 日常指導での工夫

「課題③ 実用的文章を読み取る力を高める指導はどうあればよいか」については、国語科の特性上、一朝一夕にできるものではなく、発達に応じた指導の積み重ねと、他教科での関連的指導や家庭学習といった日常指導が大切であると考えた。

そこで、実践例をより多くの学級で展開できるように、国語班から提案した。

ア	日記の活用 書くための条件を付けた日記指導で書く力、思考力、想像力を付ける。 <条件の例> ・既習の接続詞を使う ・テーマや題を与える ・字数制限を設ける 等
イ	新聞の活用 新聞から気になるニュースを取り上げさせ、感想を書かせる。 新聞に投稿された意見について、自分は賛成か否かの立場を明確にして意見文を書かせ、その文を掲示して、それに対して更に論じさせる。
ウ	他教科での文体の活用 学習のまとめで、文頭、文末に国語で学んだ言葉を意図的に使用させる。 他

日々、多忙な学級の中で、簡単に、継続して、みんなで実践していくことが課題解消となることはいうまでもない。本研究所、国語班の研究がその一助になればと考えている。



### (3) ねらいに応じた授業モデルの作成

今までの算数・数学科学習は問題解決的な学習をベースに行っている。踏み込んでみると、ねらいに応じて時間配分を考えて授業を行っておらず、身に付けさせたい力を付けさせることができずに授業が終わってしまい、習熟されていない、思考力、表現力が十分に育っていないのではないかと考えた。そこで、単元や1単位時間のねらいや児童・生徒に付けたい力を明確にし、ねらいに応じて学習指導過程を柔軟に変えていくことが必要だと考えた。

「つかむ・見通す」段階に指導の重点をおいた授業モデルA、「考える」段階に指導の重点をおいた授業モデルB、「きたえる」段階に

指導の重点をおいた授業モデルCを作成し、どこに重点を置いて指導を行えばよいのかを考えて授業を行えるようにした。そのことで、「たかはるの子」の基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力、表現力等の向上につながると考えた。

### (4) 活用ブックの作成

これまで、教師用の系統表をつくるという実践は行ってきた。合わせて、児童・生徒用の系統表があれば、既習事項を意識して、より主体的に授業に取り組むことができるのではないかと考えた。

今後以下のような効果が得られると考え、活用ブックを作成し

<p>&lt; 1単位時間における効果 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「つかむ・見通す」段階で、児童・生徒が既習事項を確認し、本時学習の見通しを立てたり、めあてを立てたりする際に活用できる。</li> <li>○ 「考える」段階で、自分の考えを整理する際に活用できる。</li> <li>○ 「きたえる」段階で、既習事項を振り返りながら、適応題・応用題を解く際に活用できる。</li> </ul> <p>&lt; 家庭学習における効果 &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 既習事項を振り返るとともに、問題を解く際に手軽に活用できる。</li> </ul>	
--	--

授業モデルC 「きたえる」段階に重点を置いた学習指導過程 ポイント		
○ 児童・生徒が考えを一般化した後、多くの適応題を解き、技能面を高める際に有効。このとき、児童・生徒の実態によっては難易度に合わせた問題をさせることによって、意欲を継続させながら技能を高められるようにする。		
段階	学習活動	留意点（メリット）
つかむ	○ 学習問題の提示  ○ 相違点からめあての設定	○ 本時の学習問題を提示し、既習事項、前時の復習問題と比較させ、違いを見つけさせる。 ○ 相違点からめあてを設定することで、めあてを児童・生徒に作り出させ、意欲を高める。
見通す	○ 課題解決の見通し ・ 解決の方法 ・ 答えの見通し ・ 解決の手順 ・ 学習の流れ	○ 課題解決の見通しを十分に引き出し、解決がスムーズにできるようにする。
考える	○ 学習問題の課題解決  <div style="text-align: center;"> </div>	○ 個人思考に十分時間を取る。教師は机間巡視しながら、一人一人が問題解決できるように支援する。 ○ 全体で考えを共有する。その際には「はかせ」（早い、簡単、正確）の3つの視点で考えさせる。
まとめる	<div style="text-align: center;"> </div>	○ 本時のまとめを児童・生徒に考えさせ、発表させる。その際に、条件提示や穴埋めを行い、まとめが自分で行えるように支援する。
きたえる	<div style="text-align: center;"> </div>	○ 児童・生徒が考えを一般化した後、多くの適応題、応用題を解き、考えを確かなものにした。既習事項を生かして解かせたりし、技能面を高める。

【資料2 授業モデルC】



【資料3 活用ブックの一部抜粋】

**(5) 授業実践例**

学 年	小学校 第1学年	単元名	「3つの数の計算」(全4時間)	
活用した資料	資料2 資料3			
<p><b>【授業の概要】</b></p> <p>課題の一つである「( )がある時の計算」の指導の充実を図るために、第1学年の算数科学習において授業実践を行った。実践した単元は、「( )がある時の計算」の系統性を考えて、「3つの数の計算」である。実践した学級の児童数は8名と少人数のため、個に応じたきめ細かな指導が展開しやすく、その利点を生かしながら「分かる授業づくり」に心がけた。研究授業を行ったのは、3時間目(全4時間の単元構成)である。この単元は、1位数どうしの2口の加法、減法を学習してきた児童が、初めて3口の加法加法、減法減法、加法減法の3つ数の計算を学習する単元である。一つの式に表すことによさや、順序よく左から計算をする方法を学習する大切な内容である。</p>				
<p><b>【授業モデルの活用】</b></p> <p>「分かる授業」をつくるためには、まず、単元全体を見通して4時間分の問題解決的な学習指導過程を考えることが不可欠である。これまで「考える」段階に時間がかかり「きたえる」段階まで到達せず授業が終わったり、「つかむ・見通す」段階で問題への解法や解が見通せず、十分な理解ができないまま授業が終わったりと指導に必要な時間不足が起こってしまった。こうした課題を乗り越えるために、授業モデルを活用して1単位時間の学習指導過程でどこに重点をおいて指導のメリハリをつけるのか見極めることとした。</p> <p>この単元は、<math>5 + 3 + 2</math>のような加法加法の例題、<math>10 - 4 - 2</math>のような減法減法の例題、そして、<math>4 - 2 + 5</math>や<math>7 + 3 - 8</math>のような加法と減法が混在した例題へと指導を行う単元であるため、学習が進むにつれて既習した計算方法を活用しやすく、「つかむ」「見通す」段階や「考える」段階において効率的に授業を進めることができ、時間の短縮を図ることができる。そのため、習熟を図る「きたえる」段階に重点を置いた指導となる授業モデルを活用して計画を立て実践を行った。その結果、「つかむ・見通す」段階では、時間は短かったが児童は見通しをもち個人思考、集団思考とスムーズに学習を進められた。そして、「きたえる」段階の時間を13分以上も確保することができ、児童一人一人の理解度を図りながら個に応じたきめ細かな指導ができた。</p> <p>この実践を通して、「( )がある時の計算」の指導につながる系統性を意識した単元の指導を計画することができた。さらに、この単元における教師のねらいと児童の学習のめあて、まとめが一致した学習を展開したことで、「分かる授業」をめざした指導の工夫・改善を行うことができた。</p>				
<p><b>【活用ブック】</b></p> <p>この単元は、系統的に「( )がある時の計算」につながる最初の学習内容となるため、活用ブックを直接、児童が問題を解決するためのツールとして進んで活用することはあまり見られなかったが、個人思考において加法や減法の計算方法を振り返る際に役立つ児童が見られた。今後は、活用ブックの蓄積により、学年が進むにつれて活用の幅が広がっていくと考えている。</p>				

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
つかむ	授業モデルA			
見通す				
考える		授業モデルB		
まとめる				
きたえる			授業モデルC	授業モデルC

## Ⅶ 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

- 国語科学習指導研究班、算数・数学科学習指導研究班ともに課題に沿った系統表を作成したことで、小学校1年生から中学校3年生までの9年間にわたる学習内容のつながりを視覚的にとらえ、指導に役立てることができた。
- 本町独自の学習指導過程のモデル（たかはるスタイルの学習指導過程や、ねらいに応じた授業モデル）を作成・配付したことにより、本町ならではの「授業づくり」の見直しを図ることができた。また、そのモデルを生かした授業実践を積み重ねる中で、児童・生徒にとって分かる授業に必要な学習活動を精選することができるようになった。
- 研究員の学級において読み取る力を高める日常指導の手立てを継続して行ったことで、児童・生徒の「考えをまとめる」「書いて表す」などの表現力が高まってきた。

### 2 研究の課題

- 今後は、教師側だけではなく、児童・生徒側にとっても授業で活用できるような系統表の作成を目指していく。
- 児童・生徒が問題解決的な学習において、系統性を意識して問題を解いたり解決への手がかりとして参考にしたりできる活用ブックを作成して配付できるようにする。
- 町内の各学校へ研究の成果が広められるように、実践事例を増やして成果を示すようにする。

#### 【参考文献】

- ・ 「平成26年度宮崎県教育研究機関連絡協議会第32回研究発表大会研究集録」  
平成27年2月 宮崎県教育研究機関連絡協議会
- ・ 「平成25年度全国学力・学習状況調査解説資料 小学校国語」
- ・ 「平成25年度全国学力・学習状況調査解説資料 中学校国語」
- ・ 「平成25年度全国学力・学習状況調査解説資料 小学校算数」
- ・ 「平成25年度全国学力・学習状況調査解説資料 中学校数学」  
平成26年4月 国立教育政策研究所教育課程研究センター
- ・ 小学校学習指導要領 平成20年3月 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領 平成20年3月 文部科学省
- ・ 小学校国語教科書（東京書籍）
- ・ 中学校国語教科書（光村図書）
- ・ 小学校算数教科書（啓林館）
- ・ 中学校数学教科書（啓林館）

#### 【研究同人】

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
教育委員会 教育総務課	所 長	江田 正和	狭野小学校	教 諭	黒木 賢一
	研究指導員	濱砂 敬三	後川内小学校	教 諭	中原 智子
高原小学校	教 諭	池袋 豊	高原中学校	教 諭	福松 直樹
広原小学校	教 諭	杉山 真一	後川内中学校	教 諭	黒木 幸